

国語

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

秋の初めから雨が多かった。

岐阜にいるみち子を俊夫と柴田とが訪ねて、三人で長良川に臨んだ旅館に行った日も、朝からの雨のままに暮れてしまった。^①旧暦七月の満月の夜であったが、雨のために鵜飼の船も出なかった。

東京に帰ってから俊夫は頭の中にも長良川の早瀬の音を聞いていた。晴れた日にも、雨景色の物寂びた都会の岐阜にいるかのように思われがちだった。みち子と過した日^{すし}が心にしみついていたのであった。

そして十月になってから、二度目に来た岐阜の朝も重い雨雲が今にも落ちそうであった。^③

俊夫と柴田は停車場前の宿で朝飯を食って、郊外の田舎町へ行った。名産の雨傘と岐阜提燈^{ちようちん}を作る家が多いその町の澄願寺という真宗の寺へみち子は養女に來ているのである。二人が九月に來た時は俊夫を宿に待たせて、柴田がみち子を誘い出しに行ったので、俊夫は寺へ初めて行くのだった。

澄願寺には門がなかった。道に立停^{たちどま}つて、境内のまばらな立樹^{たちき}越しに奥を窺^{うかが}っていた柴田が云った。

「みち子がいる、いる。ね、立ってるだろう。」

俊夫は柴田に身を寄せて伸び上^{あが}った。

「梅の枝の間に見えるだろう。……和尚の壁塗りを手つだってるよ。」

そう云い云い柴田は境内へ歩き出した。

落着^{おちつ}きを失っている俊夫には、その梅の木さえ見分けがつかなかった。

けれども壁塗りと云う言葉は俊夫をふと寂しくした。

見えないけれども、小さい板に水でこねた壁土を載せて背つぎ(註)の上の和尚に捧たてげているみち子の姿が持つ感じが心に浮うんだ。
顔を紅あからめそうになった。^a

九月に会った時、柴田がみち子に手相を見てやろうと云った。みち子は敷いていた座布団の下に両手をしっかり隠してこぼんだ。彼は腕をとって、握てのひらっていた掌を碁盤の上に開かせた。ずっと後にみち子がトウトツに顔を紅くしてひとりごとのように云った。

「岐阜にいと土方の真似までさせられるのでいやになってしまふ。」

「どうして……。」

「寺を建てるのにいろんな手つだいをさせられるんですわ。大工になったかと思うと、このごろは壁塗りで左官屋ですわ。壁土をいじることだけは、いやでいやでしょうがない。……」

荒れた手の弁解をしているのであった。東京にいた時には指の細く伸びた手をしていた。しかし、

「いやですわ。わたしいやですわ。手相なんか見てもらうのは大嫌いですわ。どうせ悪いんですわ。」と叫ぶように云っていたみち子は、不恰好(6)に大きくなった手を見られたくないだけではないのかもしれない。指先を抑えられながら、小刻みに掌を動かして柴田の眼を逃れていた。叱られてからあきらめたように静かにした。

俊夫自身が手相を見せるのは、たとえ戯れでもいいやなのであった。自分の弱点をさらけ出しでもするように恥はづかしいのである。手相と人間の運命との関係を決して信じているのではないし、⁽⁷⁾玄人に判断させたこともないのだが、何とはなしに人には隠していたかった。

みち子の手相を見て、柴田は笑い出したが、俊夫ははっと驚おどろいた。その掌には普通の人とは何倍か知れない多くの筋がごたごたにこんがらかっていた。

「何だい、これは。何が何だか分わかりやしないじゃないか。どうしたんだ、滅茶苦茶だよ。」

「僕のもの、これだよ。」と云って、誰が見てもあきれる程に無数の筋が混雑している掌を俊夫は碁盤の上に出してみせた。

「まあ、ひどい。」

みち子は自分のを忘れて笑った。

「こんなのは苦勞が多いんでしよう。きつと悪いんですわ。誰だつてそう云いますわ。」

「そうとも限らないさ。」と云つて、柴田は当り障りのない見立てを述べていた。

みち子はおとなしく聞いていたが、手を膝に戻すと云った。

「えええ、何とか仰おつしやつてゐるわ、真面目くさつた顔をして……。」

それで皆が笑ってしまった。柴田は女の手相を見たがる癖があるだけのことである。

そしてなにげなく笑っているが、俊夫は手を見せる時に卑屈な心のときめきを感じていた。続いて、生き生きした思⑧いを自分一人に盗んでいた。珍らしい手相の似通いをみち子に認めさせ、それを偶然投げ与えられた綱として、みち子というものにおどおど攀よじ登ろうとしていた。

そして自分とみち子をつにして眺めて、そこに新しい感傷を見出していた。

俊夫は手相学のことをいささかも知らない。常々自分の手相を凶だと我流で思つてはいたが、慘苦に満ちていても波瀾はらんに富むかもしれない生涯の予言が、掌に書かれているのかしらと、時たま空想した。それを楽しむ若氣があつた。そしてみち子の手相を見た瞬間に、自分の過去とみち子の過去と二つの追想が一つになって迫つて来た。その氣性からも予想出来るみち子の未来の變転を見たように思つた。その思ひの底には、自分の未来の傍にみち子のを置こうとする願ひに似た弱々しいものが動⑨いていた。なぜだか、それは寂しい静かな氣持と軽い焦いらい立たしさとが交まじつた感じであつた。俊夫だけが手相を種にひそかに一人相撲をつづけていた。しかし意味のないかのように装つて手を見せた時から、自己嫌惡を感じ始めていた。下らない手相なんかにこだわつて、しかも何氣ない顔をしている自分の卑屈を非常にコチョウして自己嫌惡を強めていた。俊夫のよく嘗なめさせられる最もにがい感情であつた。

実を云えば、京都の停車場で柴田と落おち合つた時に、岐阜に途中下車することを少しためらつた。学校の夏休みの終おわりに一しよに

上京する約束には、みち子を訪ねるということが暗に含まれていた。柴田はその年の春にも岐阜でみち子に会っていたし、一人でも行くだろうが、俊夫にはとうていその勇気がないから、柴田につれて行ってもらおうということになるのである。東京でもみち子の前では、俊夫は柴田や西村達の影のようにしていた。その後もみち子は柴田によくなついていた。そして彼は友人の前でも女に露骨に向う男であった。

久しい年月、俊夫は自己に蔽いかぶさっているいろいろのものから解脱することをキネンしていた。^⑫ 洗い落したいいろいろなものがしみついていて、俊夫を限りなく孤独に暗鬱にしていた。それらは境遇や身体やその他のことから来ていた。しかしだんだん明るい心になりかかっていた。みち子が東京でみていた頃とはだいぶん変つて来ている。

^b そうした俊夫は柴田と一しよにみち子に会うことを軽く恐れた。^⑬ いやな自分を感じる機会を与えられて、そのいやな自分の姿をひそかに眺めつづけて堪えがたい思いを味うかもしれない。しかしみち子に会うことは夏からの強い興味であった。

「俊さん、たいへん元気におなりなさいましたのね。」と俊夫が座をはずした時にみち子は柴田に云った。^c みち子にもそう見えたのであった。

みち子を見た最初から俊夫は楽しくつろげたのであった。女に対している自分と、その自分を傍から厭がっている自分とが、両方から縛り合つて、窮屈にされるのが常であった。そうなると俊夫の全体から女に働きかける総ての表情が奪われてしまつて、ほかの男がいれば第三者の位置に直ぐ逃げるのであった。それは女馴れないからとか恥しいからとかだけではなかった。ところがその時は珍らしく自由にみち子に向いて行つた。そしてみち子は柴田と俊夫に殆ど分け隔てなく話しかけ、柴田はいつもとちがつて穏かに俊夫に席を分けていた。それが俊夫には意外だったので、元気づけられた。俊夫自身もまたその頃不思議におしゃべりになつていたのであった。半年ぶりに帰省すると、郷里の人々はその変りようを驚いていた。

柴田がみち子を迎えに行っている間に、俊夫は雨の中を電車で長良川を見に行つた。岐阜公園に寄つて名高い名和昆虫研究所の標本を見て帰つて来ると、みち子は宿に待っていた。軽い風邪でお針の稽古通いを休んでいたので早く来られたのであった。

俊夫が部屋に這入ると、二人は六畳の極隅のほうに小ぢんまり対い合つてトランプをしていた。みち子は手のトランプを畳に置

いて、ていねいにおじぎをした。頭を上げる時に少し顔を紅くした。

みち子の姿から素早く俊夫は非常に新鮮な感じを受けた。東京の記憶を裏切られ、想像を破られたところに生れる^{うま}軽い驚きが、彼の心にはいい感じをぼたりと落した。いい顔になったと直ぐ思った。見ちがえるほど健康^dそうになっていた。それよりも、姿全体から出る気持がすっかり新しかった。

¹⁴心の掌におとなしく小さく載つけられそうな気がした。静かなすなおな親しみを感じさせた。家庭の娘らしくなっていた。彼はそれらのことをみち子に予期していなかったのであった。

(川端康成「南方の火」による)

(注) 背つきⅡ踏み台。

〔問一〕問十一については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問十二・問十三については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 傍線①「旧暦七月」の別名として正しいものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 水無月 | 2 | 文月 | 3 | 葉月 | 4 | 長月 |
|---|-----|---|----|---|----|---|----|

問二 傍線②「東京に帰ってから俊夫は頭の中にいつも長良川の早瀬の音を聞いていた」は、俊夫のどのような心情を表しているか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 みち子と過ごした時間が胸に深く刻まれ、彼女への抑えきれない思慕を抱き続けている。
- 2 自然の静寂と広大な長良川の魅力に深く惹かれ、都会では得られない心の安らぎを感じ続けている。
- 3 岐阜で過ごした穏やかな時間への郷愁と、寂しい都市生活との落差による違和感を抱き続けている。
- 4 岐阜でのみち子の境遇を思い起こし、彼女の貧しい生活と酷薄な運命に同情して、遣る瀬無い思いに耽っている。

問三 傍線③「重い雨雲が今にも落ちそうであつた」の表現上の特徴の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 天候の描写に幻想的な表現を用い、岐阜の陰鬱さを印象付けている。
- 2 雨雲の重量感を隠喩的に描くことで、俊夫の内面の不安を暗示している。
- 3 直喩により雨雲に意思を与え、俊夫とみち子の未来に降りかかる不穏な出来事を予兆させている。
- 4 雨雲の動きに緊張感を持たせることで、俊夫と柴田の關係に潜在する対立や葛藤を浮き彫りにしている。

問四 傍線⑥「不恰好に大きくなった手を見られたくないだけではないのかもしれない」のはなぜか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 複雑に絡み合った手相を俊夫に見られ、笑われてしまうのが嫌だったため。
- 2 手相に刻まれた運命を指摘され、自分の未来を見透かされる不安があったため。
- 3 労働で荒れた手を恥じ、過酷な生活環境が他人に知られるのを無意識に恐れたため。
- 4 手相を見せること自体が無意味と考え、強引な柴田を暗に批判する気持ちが強かったため。

問五 傍線⑧「生き生きした思いを自分一人に盗んでいた」とあるが、その意味内容の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 俊夫はみち子との共通点を見出し、柴田には知られないように密かにみち子との親密感を味わっていたということ
- 2 柴田とは異なる視点からみち子を見ることで胸の高鳴りを感じたが、その高揚感を柴田には隠そうとしたということ
- 3 柴田がみち子の手相を見ているとき、俊夫はみち子の特別な魅力に改めて気づき、その幸福感に浸っていたということ
- 4 みち子は柴田には分らないように密かに好意を示してくれたので、俊夫は柴田に対し心の中で優越感を持ったということ

問六 傍線⑨「なぜだか、それは寂しい静かな気持と軽い焦立たしさが交った感じであった」とあるが、この時の俊夫の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 みち子の過酷な境遇を気の毒に思うとともに、みち子との未来を勝手に夢見ていた自分に対し恥ずかしさを覚えた。
- 2 自分とみち子が似た境遇を持つことを嬉しく思い、これからは焦らずに互いに励まし合うことで明るい未来が開けると期待した。
- 3 自分とみち子の過去が似ていることに戸惑い、みち子から距離を取ろうと考えたが、結局思い直して彼女と未来をともに生きようと思った。
- 4 自分とみち子が似たような過去を生きてきたことに思いを馳せる一方で、二人の未来が交わらない可能性を思い描き、不安な気持ちになった。

問七 傍線⑩「一人相撲」の意味内容の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 みち子と押し問答をした挙げ句、頑な態度を取り続けてしまったこと
- 2 みち子の反応とは関係なく、自分だけで空想や感傷を膨らませ続けていたこと
- 3 手相の結果に納得できず、無理にみち子の意見を引き出そうと努力していたこと
- 4 みち子とのやりとりを楽しむ余裕がなく、自己防衛的な言動を繰り返していたこと

問八 傍線⑬「いやな自分を感じる機会」とはどのようなことか、その説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 みち子に対し馴れ馴れしい態度で接してしまうこと
- 2 みち子の不幸な境遇に必要な以上に悲観してしまうこと
- 3 みち子に対し積極的に振る舞えない自分を痛感すること
- 4 手相に頼り、みち子との関係を勝手に期待してしまうこと

問九 傍線⑭「心の掌におとなしく小さく載つけられそうな気がした」とあるが、その表現の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「心の掌」という表現は、みち子を自分の心の中でいつくしもうと願う俊夫の気持ちを表している。
- 2 「掌」に「載つけられそう」という触覚的な表現は、みち子を束縛しようとする俊夫の父性的な性格を示している。
- 3 「おとなしく小さく」は、みち子が周囲に流され、主体性を失っている様子を示している。
- 4 「小さく載つけられそう」は、みち子が俊夫に依存することと、俊夫がみち子を子どものように扱おうとしていることを暗示している。

問十 二重傍線 a、d の説明として、**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1 a 「顔を紅らめそうになった」の「そうに」は、様態の助動詞で、行動が起こる気配・兆候を表している。

2 b 「そうした俊夫」の「そう」は、直前の内容を受ける指示語であり、「そうした」は「そのような」という意味で用いられている。

3 c 「みち子にもそう見えた」の「そう」は、直前の状態を受ける指示語で、「そのように」という意味を表している。

4 d 「健康そうになっていた」の「そうに」は、形容動詞「健康そうだ」の語幹で、見た目から判断した印象や様子を表している。

問十一 本文の叙述の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

1 俊夫の一人称による内省的な叙述

2 俊夫の内面に焦点を当てた三人称の叙述

3 全知全能の第三者の位置に基づく客観的な叙述

4 登場人物の内面に等しく焦点を当てた多面的な叙述

問十二 本文を前半と後半に分ける場合、後半の始まりとして最も適当な箇所はどこか、その冒頭の五文字を本文中から抜き出さなさい。

問十三 傍線④⑤⑦⑪⑫のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

確か一中^(注1)の四年生になった時だと思う。生物の時間に進化論の初歩的な解説を習った。教頭の武田丑之助先生からである。「ウシヤン」というあだ名を、生徒がつけていた、相当の年輩で、たいへん物知りの先生である。話し方も上手であった。

はじめにラマルクの用不用説を紹介された。生物がそれぞれのキカン^①をしじゅう使っていると、それがだんだん発達する。それによって生物は進化して行くというのである。これは私にはたいへん納得しやすい考えであった。ところが先生は、この説はだめだと言われる。生物が^{うま}生れてから獲得した能力は、遺伝しないから、進化の役には立たないと言われる。

そこで次にダーウィンの進化論の解説がはじまる。生物の同じ仲間同士の間で生存競争が行われる。こういう^{しくみ}仕組で生物が進化していくというのである。

この考えは私にはどうもよくわからなかった。家へ帰ってからもう気になるので、裏庭を歩きまわりながら、先生の話を考え直してみた。〔略〕

進化論の話聞いて帰ってきた私には、キャッチ・ボールや砲丸投げは、全然念頭になかった。何度も何度も、庭の中を歩きまわりながら、生物の進化の不思議を思いめぐらしていた。自然淘汰^{とうた}が起る^{おこ}ためには、生れた時から適者と不適者の間の差違が存在していなければならない。成長してから^{おこ}の違いを問題にするなら、ラマルク説と同じことになる。そんなら、そういう生れつきの差違はどうしてできたのか。この点についての先生の説明は、はつきりしなかった。しかし、先生がどう言われたにせよ、中学生^②の乏しい知識で、いくら考えこんで見ても、進化論が徹底的にわかるはずはなかったのである。

ずっと後になって^③推量して見ると、当時の私は、ほとんど無意識的に、自然界で起る出来事には一つ一つ因果的必然性があるという考え方を、唯一絶対と信じていたのであると思う。従って宿命論を唯一の合理的な考え方として、^{うけい}受入れやすかったのである。ところが生物のある種類の全体に対して、進化という、^④合目的とも見える現象が起る。そこには何か私の単純な考え方で

は解決できないものがあることを、子供なりに感じ取ったのであろう。

私はこの時 **A**、二十世紀初頭に物理学の大変革があったことを知らなかった。私が子供心に唯一の合理的な考え方だと思っていたところのものが、実は十九世紀末までの科学者が絶対に正しいと信じてきた考え方にほかならないことさえ、はつきり認識していなかった。**B** 量子論とか相対性原理とかいう、十九世紀までのいわゆる「**C** 物理学」の根底をゆるがす新しい学説が、二十世紀初頭に現われていたことなど、もちろん知らなかった。

しかし、ダーウインの進化論を理解しようと思って苦しんだという事実は、私の精神の成長過程の中で、重要な意味を持っているように思われる。私の潜在意識は、このころからそれまでとは違った方向へ向って、活発な反応を示し始めていたらしいのである。

少年期の感傷から、青年期^⑤のロマンチックな心情へと変貌し始めていたらしい。

後になって考えて見ると、当時の私が、人生の空しさを知りつくした人の知恵を代表する老子よりも、雄大な空想に自分で酔っているような莊子の方にひかれたのも、故あることであつたろう。私の身体にも青春の血が流れ始めていたのである。一日も早く一中を去って、お隣りの三高^(注2)に入りたいという気持^(きもち)が強くなりつつあつた。

アインシュタイン博士が日本を訪れたのは、それから間もなくであつた。私の中学四年生の二学期も、終りに近い^(おわ)ころであつた。

雑誌「近衛^(注3)」に童話を書き、幾何学の魅力につかれ、進化論の理解に苦しみ、そして老莊の書に人生を思う。——そんな、一見不統一な少年期の心情というものは、今から思うとむしろ微笑^(ほほえ)ましい。いわばリーダーを備えた船が、濃霧の中に目標物を探しているようなものだ。

少年のリーダーは、ある日、ついに何ものかを探り当てた。遠く、はるか彼方に。けれども余り遠い存在だったから、最初のうちは、それが自分にとってどんな意義を持つものかを感知することは出来なかった。むしろ、再びそれが遠ざかって行ってから、私はその存在を新しく確認したのであつた。

「アインシュタイン博士、訪日」

という記事が、新聞紙面に現われたのは、大正十一年の夏の終り——私の中学四年のなかばごろだったろうか。

アインシュタイン博士の相対性理論は——そのころは、相対理論とも呼ばれていた——理解出来ないままに、日本の民衆の口の端にも上っていた。石原純博士などは、早くからこの理論に^⑥ケイトウしていた。日本訪問がきまると、新聞にも雑誌にも、アインシュタインの名が^{はんらん}氾濫した。

アインシュタイン博士を招いたのは、改造社だった。この雑誌社は数年前に出版界から消えてしまったが、中央公論社と共に日本の知識層を二分していた雑誌の発行元だ。当時はおそらく社運も^⑦隆々としていたのだろう。改造社すでになく、アインシュタイン博士も^⑧物故された。——

新しく調べて見ると、博士は大正十一年十一月十七日、北野丸で神戸に到着。それより半月も前であつたろうか、博士はノーベル賞を授与されたばかりだったのである。〔略〕

私はまだ物理学に十分大きな興味を持っていなかった。数学の勉強に、より熱心であつた。

そのころはまだ、物理学者の著書が専門以外の人々にも読まれるということとは非常にまれであつた。その代り^{かわ}哲学方面の書物が、盛んに出はじめていた。岩波書店の哲学叢書^{そうしゆ}が、もう何冊も出ていた。西田幾多郎博士の「善の研究」はずっと前から、多くの若い人々を感激させていた。哲学者の田辺元博士の「最近の自然科学」が哲学叢書の一冊として出たのは、このころであつたろうか。この中に「量子論」という言葉が^⑧E出てきた。私には何のことだがさっぱりわからなかった。しかしそこに、何か神秘的な魅力を感じはじめていた。そして量子論の創始者、マックス・プランクにほのかな尊敬の念を抱きはじめていた。

物理学者は当時は、ジャーナリズムとは、ほとんど無縁な存在であつた。しかし石原純博士は例外であつた。^⑧理論物理学の新しい動向について、盛んに雑誌や新聞に書いておられたようである。「相対性原理」という大きな書物も出ていた。私にはそれはまだ猫に小判であつたが、アルバート・アインシュタインの名は、いつしか私の耳にも入っていた。

私の潜在意識は、理論物理学の方^{むか}へ向つて、徐々に活動を開始しつつあつたのかも知れない。そのせいか、四年生になってから

は、物理実験に熱心になっていた。

二人が一組になって物理実験をやった。私の相棒は工藤信一良君であった。湿度の測定の実験をやっていた時のことである。

エーテルを急に膨脹させると蒸発して温度が下る。容器の金属の表面に露ができる。この時の温度と室内の温度をくらべると、空気の湿度がわかる。そういう仕掛^{しかけ}である。私はこの実験にうまく成功した。非常に愉快であった。

その時、工藤君が突然、

「小川君はアインシュタインの^⑨ようになるだろう」
と言った。

その瞬間私は何のことかわからなかった。私はまだ自分が理論物理学者になるだろうとは、全然思っていなかったのである。物理実験の時間が終ってから、工藤君の言葉を思い出した。私は何となくうれしくなってきた。私はまだ自分が何であるかを知らない、混沌^⑩たる存在であった。莊子に出てくる、目鼻のつかない混沌であった。

私の年級には、もつとはっきりと目に立つ生徒が何人もいた。谷口知平君は、ほとんどいつも、首席で通した折紙つきの秀才であった。市村文雄君は野球の選手をしながら、頑張って首席になったこともある。井手成三君も三年ころからトウカクをあらわして来た。湯浅佑一君も秀才であると同時に、ランニングや野球の選手でもあった。私は数学がよく出来るとい以外、まだ何ものでもなかった。

アインシュタイン博士は、私からは余りにもかけはなれた偉大な存在であった。工藤君の言葉は、現実とは何の関係もないように思われた。それにもかかわらず、工藤君の一言は私の舟を取りまいて^⑫いる氷に、目に見えぬひびを入らせたようであった。

(湯川秀樹『旅人』による)

(注1) 一中＝旧制中学校制度の下、京都府立京都第一中学校の略称。なお、旧制中学は、尋常小学校(六年制)卒業後進学した男子のみの中等教育機関だった。

(注2) 三高⇨旧制高等学校制度の下、京都市にあった第三高等学校の略称。なお、旧制高校は、帝国大学等への進学のための予備教育を目的とした三年制の男子のみの高等教育機関であった。

(注3) 「近衛」⇨旧制京都府立第一中学校の同人誌。

(注4) 小川⇨湯川秀樹の旧姓。

〔問一～問八については、マークシートの所定の欄に記入しなさい。問九・問十については、記述式解答用紙の所定の欄に記入しなさい。〕

問一 ☐ A B D Eに入る語句として、最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|----|---|-----|
| 1 | すでに | 2 | たびたび | 3 | まだ | 4 | まして |
|---|-----|---|------|---|----|---|-----|

問二 ☐ Cに入る語句として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 古典 | 2 | 現代 | 3 | 理論 | 4 | 応用 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

問三 傍線④「合目的」ということを表す例文として、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 雨が降ったから、地面がぬれた。
- 2 私が球場に応援に行くと、中日ドラゴンズはいつも勝つ。
- 3 トラックは荷物を載せるために、荷台がついている。
- 4 今朝は雲が多いので、午後から雨が降るだろう。

問四 傍線⑤「青年期のロマンチックな心情へと変貌し始めていたらしい」とあるが、これは「私」にとってどういうことを意味していたか、その説明として**適当でないもの**を次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 老子よりも莊子にひかれるようになったこと
- 2 レーダーを備えた船に目的物がいよいよ迫ってきたかのように感じたこと
- 3 ダーウィンの進化論を理解しようとして苦しんだこと
- 4 一中を去って、三高に入りたいという気持ちが強まったこと

問五 傍線⑧「石原純博士は例外であった」とあるが、それはどのような理由からか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 現代文明に直結した最新の物理学の諸課題を、初学者にも分かるように説き明かすことを第一とした科学者だったから。
- 2 難解な現代物理学の理論を、ジャーナリズムに身を置きながら、多くの大衆に平明に説き明かした科学者だったから。
- 3 現代物理学の難問を、様々な読者層を惹きつけるために、学術論文を分かりやすく工夫して著した科学者だったから。
- 4 生活とは無縁な現代物理学の理論を日常の出来事や自然現象を題材に人間味豊かな文体で解説した科学者だったから。

問六 傍線⑨「ように」と同じ意味で使われているものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「私のやるように演技をしてください」
- 2 「あの人は大理石のように冷たい人である」
- 3 「今度のテストはきつとうまくいくように思う」
- 4 「ニューヨークやロンドンのように東京は世界経済の中心地である」

問七 傍線⑩「混沌」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 粗野だが、可能性に満ちた人間の状態
- 2 物事の区別がつかずまとまらない状態
- 3 物事が多様に入り組んだ神秘的な状態
- 4 無教養で道理を踏み外した人間の状態

問八 傍線⑫「私の舟を取りまいてる氷に、目に見えぬひびを入らせたようであった」とはどういうことか、その説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 友人の一言が、些細な誤解や意見の相違を生み、それまでの親密さに亀裂が入ったこと
- 2 友人の一言が、力強い励ましとなって、自分のいくじのない心の殻を破ってくれたこと
- 3 友人の一言が、知らず知らずのうちに、大きな転機を引き起こす兆しとなったこと
- 4 友人の一言が、自分を取り巻く大人たちへの信頼を少しずつ失わせ、心が不安定になったこと

問九 傍線③「推量して見る」とあるが、その推量の内容を具体的に述べている部分の、はじめと終わりを本文中からそれぞれ十

字ずつ抜き出しなさい。(句読点、符号も字数に含める。)

問十 傍線①②⑥⑦⑪のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。文字は大きく鮮明に書きなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

作者ら女房一行は明順朝臣の家へ郭公（あきのぶ）の声を聞きに出かけた。しかし、明順自身で摘んだという下蔵（したわらび）の料理などでもてなしを受けている間に雨が降り始め、和歌を詠む機会を逃したまま帰ることになった。卯の花を折って牛車に挿して飾り立て、牛車は出発した。

人も会はなむと思ふに、さらにあやしき法師、下衆（げす）の言ふかひなきのみたまさかに見ゆるに、いとくちをしめて、近く来ぬれど、
 「いとかくて止まむは。この車のありさまぞ、人に語らせてこそ止まめ」とて、一条殿（注1）のほどにとどめて、「侍従殿やおはします。郭公の声聞きて、今なむ帰る」と言はせたる使ひ、「『ただ今まゐる。しばし、あが君』となむのたまへる。侍にまひろげて、おはしつる、いそぎ立ちて、指貫奉りつ」と言ふ。「待つべきにもあらず」とて、走らせて、土御門（注4）さまへやるに、いつの間にか装束（ぞうそく）きつらむ、帯は道のままに結びて、「しばし、しばし」と追ひ来る。供に、侍三、四人ばかり、物も履かで走るめり。「とくやれ」と、いとどいそがして、土御門に行き着きぬるにぞ、あへぎまどひておはして、この車のさまをいみじう笑ひたまふ。「うつつの人の乗りたるとなむ、さらに見えぬ。なほ下りて、見よ」など笑ひたまへば、供に走りつる人、ともに興じ笑ふ。

「歌はいかが。それ聞かむ」とのたまへば、「今、御前に御覽ぜさせて後こそ」など言ふほどに雨まこと降りぬ。「などか異御門御門のやうにもあらず、土御門しも、頭もなくしそめけむと、今日こそいとにくけれ」など言ひて、「いかで帰らむとすらむ。こなたさまは、ただ遅れ」と思ひつるに、人目も知らず走られつるを。奥行（おく）かむ事こそ、いとすさまじけれ」とのたまへば、「いざたまへかし。内へ」と言ふ。「烏帽子にてはいかでか」「取りにやりたまへかし」など言ふに、まめやかに降れば、笠（注6）もなきをのこども、ただ引きに引き入れつ。一条殿より傘持て来たるをささせて、うち見返りつつ、こたみはゆるゆると物憂げにて、卯の花ばかりを取りておはするもをかし。

(中略・その後、中宮のもとに伺候したが、和歌を詠む機会はないままであった。)

二日ばかりありて、その日の事など言ひ出づるに、宰相(注8)の君、「いかにぞ、手づから折りたりと言ひし下蔵は」^⑨とのたまふを聞かせたまひて、「思ひ出づる事のさまよ」と笑はせたまひて、紙の散りたるに、

下蔵こそ恋しかりけれ

と書かせたまひて、「^⑩本言へ」と仰せらるるも、いとをかし。

郭公たづねて聞きし声よりも

と書きてまゐらせたれば、「いみじう(注9)うけばりけり。かうだにいかで郭公の事を書きつらむ」とて笑はせたまふ……

(『枕草子』による)

(注1) 一条殿Ⅱ一条大宮にある故太政大臣藤原為光の邸。

(注2) 侍従殿Ⅱ藤原為光の六男・公信。

(注3) 侍にまひろげて、おはしつるⅡ侍所で、衣服をはだけなどしてくつろいだ姿でいらつしやつた。

(注4) 土御門Ⅱ一条大路から大宮大路に左折したところの門。土の大堀だけで屋根がないところからこの名がある。

(注5) 奥行かむ事Ⅱさらに遠くへ行くようなこと。

(注6) 笠もなきをのことも、ただ引きに引き入れつⅡかぶり笠もない作者の供の男たちが、作者たちの乗る牛車を大内裏の中へ引き入れてしまった。

(注7) こたみはⅡ(来た時とは異なつて) 今度は。

(注8) 宰相の君Ⅱ郭公の声を聞きに同道した女房の一人。

(注9) うけばりけりⅡ気がねのない、はっきりした物言いをする事だ。

〔全問、マークシートの所定の欄に記入しなさい。〕

問一 に入る語として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | |
|---|---|---|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 |
| む | じ | き | べし |

問二 傍線①「言ふかひなき」、⑦「すさまじけれ」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|--------|---|--------|---|---------|---|---------|---|---------|
| ① | 言ふかひなき | 1 | いかにも幼い | 2 | 言葉が通じない | 3 | 知り合いでない | 4 | 取るに足らない |
| ⑦ | すさまじけれ | 1 | めんどうだ | 2 | 興ざめだ | 3 | よい判断だ | 4 | 疲れてしまった |

問三 傍線②「いとかくて止まむは」とあるが、この時の作者の心情として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 和歌を詠むという約束で外出を許されたのに、このまま和歌を詠まずには帰れないという気持ち
- 2 郭公の声を聞くために外出したのに、聞くことができないまま帰るのは気に食わないという気持ち
- 3 せっかく卯の花で牛車を飾り立てたので、その姿を誰かに見せて驚かせてから帰りたいという気持ち
- 4 道の真ん中で牛車が止まってしまつては困るので、早く修理できる人が来てほしいという気持ち

問四 傍線③「のたまへる」、④「言ふ」、⑤「走らせて」、⑨「聞かせたまひて」の主体をそれぞれ次の中から選び、その番号をマークしなさい。(同じ番号を二度以上選ばないこと。)

- | | | | | | |
|----|-----|-----|----|----|------|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 作者 | 一条殿 | 侍従殿 | 使ひ | 中宮 | 宰相の君 |

問五 傍線⑥「今日こそいにくけれ」とあるが、侍従殿がそのように感じている理由として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 自分たちは徒歩で来ており、作者たちの牛車に追いつくことができないから。
- 2 今日雨は降っているのに、今いる土御門には屋根がなく雨宿りもできないから。
- 3 走ってやっと作者たちの牛車に追いついたのに、作者たちが引き返そうとしたから。
- 4 道中で和歌を詠むという趣向に惹かれてやってきたのに、雨が降っては台無しだから。

問六 傍線⑧「烏帽子にてはいかでか」とあるが、「烏帽子」に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「烏帽子」は平安時代の貴族男性の正装であり、参内を含め外出の際には必ずかぶらなければならない。
- 2 「烏帽子」は平安時代の貴族男性の正装であり、頭にかぶるものとしては冠より格上である。
- 3 「烏帽子」は平安時代の貴族男性の平服であり、参内する際の衣装としてはふさわしくない。
- 4 「烏帽子」は平安時代の庶民の衣装であり、貴族男性がかぶるのは通常、自宅内のみである。

問七 本文から読み取れる作者と侍従殿との関係について最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 ふたりは親しい間柄であり、作者は侍従殿をからかい、侍従殿は終始翻弄されている。
- 2 ふたりは親しい間柄であるが、侍従殿が作者に好意を抱いており、作者はそれを鬱陶しく感じている。
- 3 ふたりの間には明確な上下関係があり、作者の命令に侍従殿はいつも従わなくてはならない。
- 4 ふたりの間には明確な上下関係があるのに、作者が強気に振る舞うので侍従殿は苦々しく思っている。

問八 傍線⑩「本言へ」と仰せらるる」とあるが、このように、上の句と下の句をふたりで応答して詠む詩歌の形式を何というか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 掛詞 2 引歌 3 短連歌 4 本歌取り

問九 本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 作者が外出の帰りに侍従殿に使いを出したところ、侍従殿は装束の帯を締めながら走って追いかけてきた。
2 侍従殿が作者らの乗る牛車の趣向を笑ったので、作者らは気分を悪くして引き返そうとした。
3 中宮は、郭公の声を聞きに出かけたのに和歌を詠まず食べ物のことを思い出す作者らをからかった。
4 作者は中宮のからかいを理解し、あえて調子を合わせる内容の上の句を詠んだ。

問十 本文に描かれた逸話はどの季節のものか、最も適当なものを次の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 春 2 夏 3 秋 4 冬